

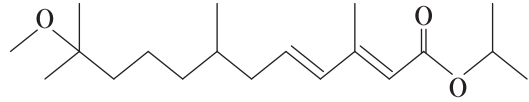
# 蚊およびハエの防除

防疫用殺虫剤

**アルトシッド® 10F** 第2類医薬品

内容量：1kg

- 梱内容：12本／ケース
- 有効成分：メトプレン10%



## ■ 用法および用量

適用害虫、散布場所に応じて希釈し、戸外の蚊やハエの幼虫が生息または発生しやすい場所に散布してください。

適用害虫	適用場所	処理方法および散布量
ボウフラ	イエカ類 水田、蓮池、池沼 側溝、下水、流溜など	水量1m <sup>3</sup> に対し200倍希釈液を1~2L散布する。
	イエカ類 ヤブカ類 水槽、水溜り 人工容器など	水量1m <sup>3</sup> に対し500倍希釈液を1.25~2.5L散布する。
ウジ	イエバエ ゴミ溜、厨芥など	1m <sup>2</sup> あたり500~1,000倍希釈液を2~4L散布する。

## ■ 散布量の目安

有効成分濃度を1ppmに設定した場合、蚊に対する必要薬量および散布量(200倍希釈液量)は右表の通りです。

散布水域水量(m <sup>3</sup> )	10	50	100	150	200
必要薬量(本)	1/10	1/2	1	1+1/2	2
散布量(L)	20	100	200	300	400

## ■ 特長

### 1. 有効成分メトプレン配合

昆虫成長制御剤メトプレンの作用により、蚊やハエの変態を抑制し、成虫の出現を抑えます。

### 2. 高い安全性

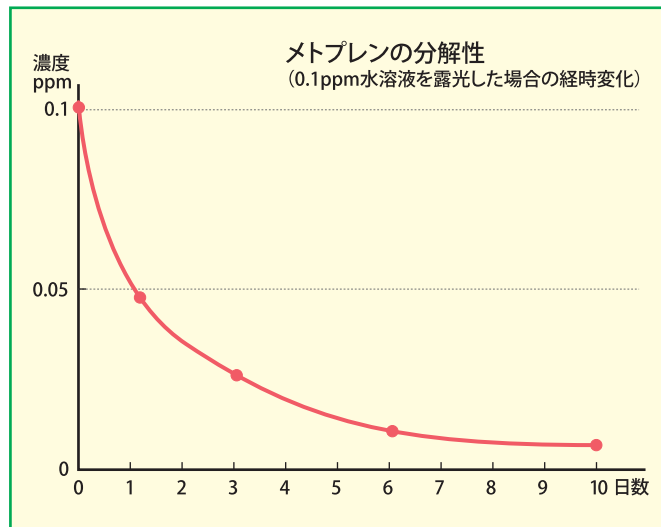
哺乳類、魚類、その他有用動物に対する毒性が極めて低い薬剤です。

### 3. 環境を汚染しない

有効成分のメトプレンは、効力発現後、自然環境下ですみやかに分解されるため、残留性が低く、環境に蓄積されることはありません。

## ■ 効果

害虫の羽化を阻害する薬剤であるため、薬剤散布後、直ちに幼虫や蛹が死亡することはありません。効力を確認するためには、散布した場所から蛹を採集し、羽化できるかどうかを観察してください。アルトシッド®10Fの残効期間は、散布場所の環境と気象条件によって若干変動します。



## ■ 基礎試験成績

● 蚊の場合  
メトプレンの基礎試験成績

対象昆虫	IC <sub>50</sub> 値(ppm)
アカイエカ4齢幼虫	0.0003~0.00054
コガタアカイエカ4齢幼虫	0.00017~0.00025
ネッタイシマカ4齢幼虫	0.00024
ヒトスジシマカ4齢幼虫	0.00211
トウゴウヤブカ4齢幼虫	0.000138
チカイエカ4齢幼虫	0.00047

IC<sub>50</sub>値：50%羽化阻止濃度

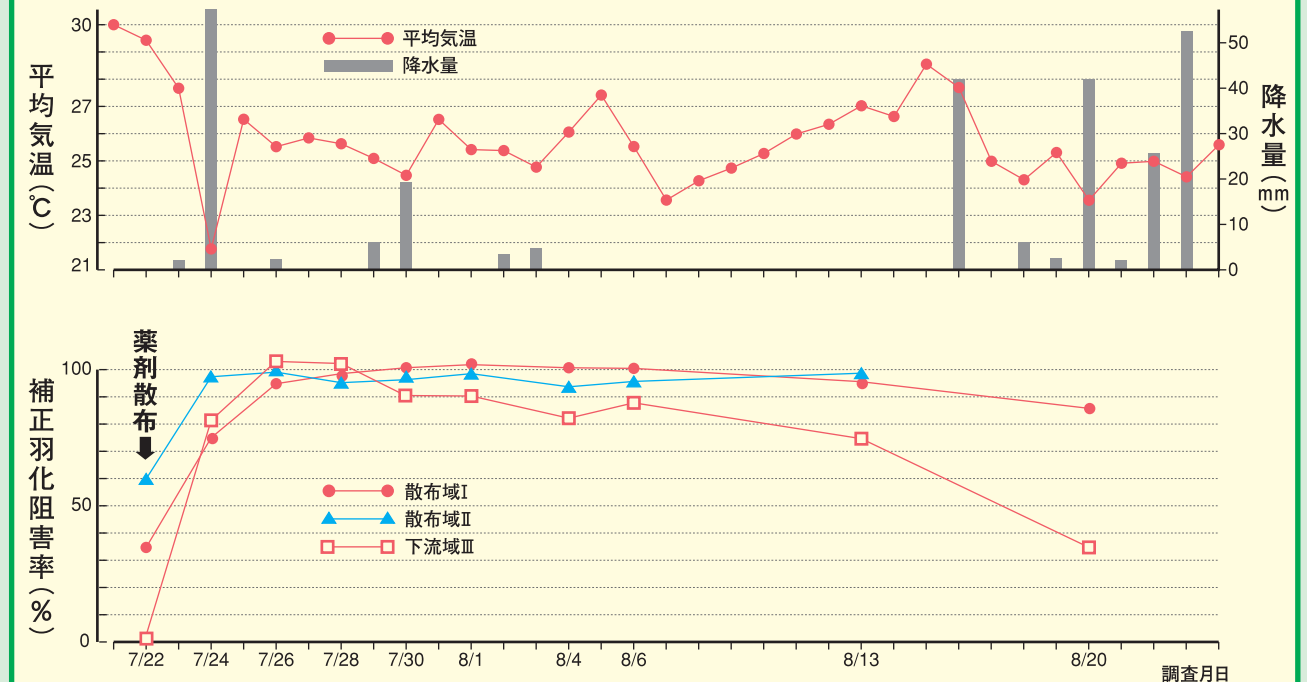
● ハエの場合  
メトプレンの基礎試験成績

対象昆虫	ED <sub>50</sub> 値(μg/頭)
イエバエ幼虫	0.0013
センチクバエ幼虫	0.033
シリアクバエ幼虫	0.072
ナミクバエ幼虫	0.023
ミドリキンバエ幼虫	0.12
クロキンバエ幼虫	0.21
ルリキンバエ幼虫	0.45

ED<sub>50</sub>値(微量滴下法)：50%有効薬量

## ■ 実地試験成績

アカイエカの場合 薬剤散布水域の条件(流速など)によって残効期間に差が出ますが、蚊幼虫には、0.25~1.0ppmの実用濃度で、長期間の防除効果が認められます。



## ■ 安全性

● メトプレンの各種毒性試験成績

毒性試験	対象動物	結果
急性経口毒性	ラット・マウス	LD <sub>50</sub> >10,000mg/kg
急性皮下毒性	ラット・マウス	LD <sub>50</sub> >10,000mg/kg
急性経皮毒性	ウサギ	LD <sub>50</sub> >10,250mg/kg
急性吸入毒性	ラット・モルモット	LC <sub>50</sub> >210,000mg/m <sup>3</sup>
亜急性吸入毒性	ラット	20,000mg/m <sup>3</sup> で毒性所見なし
眼および皮膚刺激	ウサギ	刺激性なし

LD<sub>50</sub>値：50%致死薬量  
LC<sub>50</sub>値：50%致死濃度

● メトプレンの魚毒性試験成績

対象動物	TLm48時間(ppm)
コイ	>51.7
ヒメダカ	>92.4
メダカ	>46.2
カダヤシ	>80
スジエビ	>92.4

対象動物	TLm3時間(ppm)
ミジンコ	>92.4

TLm値：魚類群50%致死濃度

アルトシッド®10Fは、標的害虫(蚊、ハエ)には高い効果を示しますが、標的外生物、例えばトンボ、ホタルなどの水棲昆虫やカイコ、ミツバチなどの有用昆虫に対しては、通常の使用濃度内では影響は認められません。その他、マガモ、ウズラに対する8日間亜急性毒性試験(食餌混合)では、10,000ppmを投与してもLC<sub>50</sub>値(50%致死濃度)は求められず、影響は認められません。